地域の宝　但馬牛物語　★1★

但馬が誇る和牛の最高峰

渡辺　大直

「但馬牛　牛小屋でお産を見た　子牛と河原で　親牛を長谷に放って　陽の落ちる頃　田んぼ道を　牛と歩んだ」

書道家、宇野雪村が表現したように、但馬牛は一つ屋根の下で暮らし、一緒に田んぼを作った家族のような存在で、いつも身近にいる何の変哲もない普通の牛だった。

ところが世間は但馬牛を思いのほか高く評価していた。鎌倉時代に書かれた『国牛十図』には「逸物多し」とある。『駿牛絵詞』では、御所車を引いた花菖蒲という但馬牛を「小柄ながら姿がよく逸物」と評価している。

江戸時代、最大の牛集散地が大阪・天王寺にあり、ここを代々、石橋孫右衛門と名乗る大博労が仕切っていた。

孫右衛門は家畜取引のプロだけあって「種牛は内国では但馬牛に限る」というだけでなく、「但馬牛の中でも小代、八木谷、大屋の牛が特に良い」と踏み込んだ評価をしている。

但馬の中心的な牛市場があった養父神社近辺から遠坂峠を越え、黒井、国領、篠山を経て名塩辺りまで「牛宿」と呼ばれる旅籠が連なり、但馬牛が天王寺に向かった道筋と考えられている。

名塩から天王寺までは少し離れているが、どうやら但馬牛は直接天王寺には行かず、三田、有馬周辺の農家に預けられたのではないかと推測する。この辺りでは牛を繁殖させる習慣がなく、年貢米を運んできた牛が毛づや良く丸々と太っていると殿様から褒美を下されたので、百姓たちは麦を食わせ、牛を太らせたという。

昔から家族同然に飼われてきた但馬牛。役割は変わったが評価は高まるばかりだ

1859（安政6）年に横浜が開港し、外国人たちがやって来た。ところが、馬文化の関東では牛が少なく、牛肉の調達に困った。幕府の命を受けた孫右衛門は、三田、有馬辺りからよく肥えた牛を集めて神戸港から横浜に送った。この牛の肉がことのほか美味で、外国人たちは〝神戸ビーフ〟と呼んで賞賛した。

このように身近に、普通にあるものが実は宝の山だったというのは間々ある話だが、但馬牛もその伝かもしれない。

神戸ビーフの需要は景気の影響を受けやすいとはいえ、国内需要は堅調で、輸出量も年々増加し、子牛価格は史上最高水準になっている。しかし、肝心の生産農家が減少し、需要に応えられなくなっている。こんな宝をくすぶらせずに、何とか地域の元気につなげたいものだ。

■筆者プロフィル■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。

（C）新日本海新聞社　無断複製・転載を禁じます